

パキスタン防災案件調査報告

4月中旬にパキスタンへ防災案件調査に行つて参りました。本調査には、アフガニスタン防災事業でも協働して頂いております国土防災技術株式会社様にもご同行頂き、自然災害による被災リスクが世界で7番目と非常に高いパキスタンにおいてどの様な防災事業を行うべきか考えてきました。

今回訪問したのは、南部シンド州の東に位置するUmerkotという町で、2010年～2011年の大規模洪水にも見舞われながら、恒常的な水不足にも悩んでいる地域です。この地区で聞き取りを行つて分かったことは、干ばつリスクは農業に従事する各家庭の収入を減少させ、衛生環境悪化などにより、医療ニーズは高まり、教育機会も減少しているという現状でした。貧困率が4割以上と経済発展のプロセスから取り残されている地域でもあります。今回の訪問で水は全ての源であると実感させられましたが、そこに追い打ちをかけるように、この地域では、井戸水の水質汚染、塩害なども報告されており、安全な水の確保、そして増減した際の水マネジメントの方法など、工夫すべき所は数多く存在します。

森林の非合法的な伐採によって、パキスタンの森林面積は2%と、他国に比べても著しく低く、荒廃した土地では水分を保持する事も出来ず、恒常的な水不足を更に悪化させています。政府主導の灌漑プロジェクトも存在しますが、インダス川から最終的に農地へ届く水は約3割強と言われており、水路の配水効率をどう上げるのかもポイントになってきます。農作物によっては、地中深く根をはるものや、少ない水でもよく育ち栄養価が

高いもの、そして少ない水でも効果的な農業が行える方法など、訪問した研究機関では様々な施策がなされています。その恩恵を貧困層にどう届けるかも、これから立案する防災案件の重要なテーマの一つです。CWS Japanでは、あくまで住民の目線や裨益を大事にしながら、干ばつ及び大洪水のリスクにさらされているコミュニティでの防災事業を立案していきたいと考えています。

(文：事務局長 小美野 剛)



シンド州における典型的な村の風景



コミュニティへの調査訪問



1 地中に陶器を埋め込んだ節水農法のモデルプロット

コミュニティの視点からパキスタンの干ばつ、土砂災害 女子教育の問題を考える

4月19日、20日にパキスタンのイスラマバード近郊で現地のNGO、ペシャワール大学、地方政府を対象としたイノベーションワークショップを開催しました。各国で実施しているこのワークショップは、CWS Japanが事務局を務めるADRRN東京イノベーションハブ（ATIH）の活動の一環として昨年から行われており、今回で7回目となります。

ワークショップをホストしたCommunity World Service Asia（CWSA）はCWS Japanがアフガニスタンで実施する「アフガニスタン東部における帰還民及び国内避難民への緊急キャッシュ配布事業」のパートナー団体でもあります。CWSAは自団体の活動での学びを蓄積し、常に新しい取り組みを生み出すLearning Organizationとなることを目指しており、イノベーションというキーワードに共鳴して今回のワークショップが開催されることになりました。

ワークショップの目的は、CWSAが認識する主要な社会課題を取り上げ、様々なツールを使い2日間かけてコンセプトを明確化することです。具体的には1）課題を取り巻くシステムを理解し、2）システムを変える鍵となる関係者を見つけ出し、3）その関係者を巻き込むシナリオを描くというステップです。このワークショップの特長はステップの1から2にかけて様々な制約を外して新しい視点でシステムを見ることで既存のプログラムとは異なる新しい解決策を見出す手法にあります。

参加者は干ばつ、土砂災害、女子教育の3つのテーマを議論するチームに分かれ、それぞれ異なる課題に向き合いました。干ばつチームは農家を支援する関係者が散在することによる情報アクセスの問題、女子教育チームは学校の設備、両親

の理解、PTAの機能、教育委員会の理解など相互に影響を与える状況において鍵となる関係者を見つけること、土砂災害チームはNGO、大学、地方政府に所属する参加者がバラバラに活動するために問題が解決しないコーディネーションの問題でした。

ワークショップを通じて3つのチームは抱える課題を異なる視点から見ることに成功し、新しい解決策を生み出すことができました。干ばつチームは地域のラジオ局と提携した農家への情報提供サービスを、土砂災害チームはコミュニティ自体にリスクアセスメントと危機対応の一次機能を持たせる研修プログラムを、そして女子教育チームはPTAの機能強化を通じて他の関係者へのアドボカシーを強化することを提案しました。これらのチームは、今後もATIHのサポートを受けながら新規案件形成に向けて取り組んでいく予定です。

（文：事務局次長 打田 郁恵）



2日間の真剣な議論を終えて
笑顔を見せる参加者